

3・11を生きるエネルギーに 変えた学校の物語

防災講話から考える

9月14日(金)の防災講話で、石巻市立雄勝中学校の佐藤淳一元校長先生から貴重なお話をいただきました。先生の講話が終わった後の鳴り止まない拍手、先生が退場する時の皆さんの表情、3人の代表生徒の感想発表。皆さん一人一人の心の中に何らかの感情が湧き起こり、何かを深く考えるきっかけになった時間だったのではないのでしょうか。その「何か」は、それぞれの「何か」で良いと思います。

講話の前、校長室で佐藤先生とお話しました。講演会は、全国各地でオファーがあり、多くの回数を重ねているそうです。お話をする事に慣れているのかと思っていましたが、実は、講話をするたびにものすごいエネルギーを使うのだそうです。「思い出したくないことも多くあるけれど、あの時の自分に戻らないと話ができないので、7年半前の自分に心を戻す」のだそうです。すると、本当にその場に立ってられないほど疲労するとの事でした。今も講演をしながら、先生を支えているのは、少しでも生徒や保護者、地域の方々、先生方に感じてほしい事があるからだそうです。

佐藤先生は、講演だけではなく、出版物としても、日本中の人達に「何か」を伝えようとしています。私も「奇跡の中学校」という本を、何度も読みました。私なりに感じる事があります。教師としての在り方、生徒との関わり、地域や保護者の大切さ、人との触れ合い、命の大切さ等、その都度、感じ方が異なります。しかし佐藤先生と話した後、講話を聞いた後、本を読んだ後、変わらず沸き上がってくる感情があります。それは人それぞれ異なると思います。

私が皆さんに「あれだけ人々が苦しんだ震災があったのだから、しっかりと防災意識を持ちなさい。」「あれだけ苦しんだ人がいたのだからそれに比べると私たちは幸せだ。」「あれだけの命を失ったのだから、命を大切にしてください。」などと話す事よりも、皆さんの心で感じた事を大切にしてほしいと心から思います。

皆さんは、今、思春期という難しい時期を過ごしています。充実感のある生徒、自信に満ちている生徒、逆に自分に自信を持てず悩んでいる生徒、言葉では表現できない不安や不満がある生徒、様々だと思います。なかなか自分の気持ちを言語化できないのがこの時期ですよね。この多感な時期に人の話を聞いて感じるものがあったり、涙を流したり、自分と照らし合わせてみたり、その時々自分の感情に向き合いながら、感性が磨かれていくのだと思います。佐藤先生のお話が、皆さんの心を揺り動かす契機となってくればとてもうれしいです。

ところで、あの講話では時間が足りなくてお話できなかった事があるそうです。震災後、雄勝に住めなくなった女子生徒が転校を余儀なくされました。転校先でいじめられ、学校に登校できなくなってしまいます。後日それを知った佐藤先生が雄勝に呼び戻したという話です。裏面にその時の生徒の思いが綴られた資料を掲載しましたので、皆さんも読んでみてください。

佐藤先生の著書「奇跡の中学校」の中に、『言葉の重み』というタイトルで、当時の生徒である伊藤美波さんが実名で寄稿しています。

裏面参照